

# デモンマン※リメイク予定

ゼパル・ガルベスク

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

怪人、それは常に悪意の象徴として君臨し続けるシンボル。  
だが、そんな怪人にも正義の為に戦う者がいた。

そんな彼は常にこう言う。

「通りすがりの怪人です」と……………

※今コラボしている作品

○機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ  
○HUNTER×HUNTER

# 目次

人生イバラ道編

0 発目：怪人始動 | 1

1 発目：怪人、自分探しのイザコザブラ

り旅 | 8

2 発目：怪人、ガチで戦います【前編】

| 21

連絡事項 | 30

## 人生イバラ道編

### 0 発目：怪人始動

俺の名は銀城羅刹。  
ぎんじょうらせつ

年齢は24歳、血液型はAB型、誕生日は

10月29日、星座はさそり座の会社員だ。

ごく普通に生まれ、ごく普通に育ち、

ごく普通に仕事に就き、ごく普通に

働いている、ごく普通の人間だ。

でも、俺が生きているこの世界は全然普通じゃない。俺が中学生の頃から怪人とか怪獣とか、更には大災害や宇宙からの侵略者まで現れる始末。

そう、今この世はアメコミ風の超人社会になっているんだ。

まあ、ぶつちやけどうでも良い。

え？なんでどうでも良いのかって？ヒーローに愛想尽かしてるからだよ。仕事になると夢のある物もくだらない何かになるみたいなんだ。

実際、今いるヒーローは金、地位、名誉とかそういうのばっかだ。その証拠にランキング制度もあるから毎日愚かで醜い争いをしている。

一番強いヒーローはS級と言うらしいが、はつきり言ってヒーローには向いてない奴らばっかだ。

ブラストは全く姿を現さないし、タツマキは他人を見下している傾向がある。他にもヒーローらしくない奴は沢山いる。

力の無い一般人が言うんだ、間違いない。

そして、俺は今仕事の外回りに出ている。

時間帯は真昼間だ、黒服は超キツイ。

銀城「アツチイ……」

俺は広場に設置されているベンチに座って汗を拭う、昼間つからチャラチャラした奴らが多い、イラツとした俺は悪くない。

「お時間頂いても良いですか？」

下を向いて休んでいた俺に誰かが声をかけた、そいつは白装束姿の男で、胸や手袋に地球を掴む鷲のマークが付いていた。

銀城「あの、なんでしよう？」

「お疲れの様ですが大丈夫ですか？ 私は訪問販売をしておりますねえ。貴方の為にいい栄養ドリンクを差し上げますよ？」

栄養ドリンク？とてもじゃないがそうは見えないのが世の断りだ。だが、よく考えてみる？もしかしたらタダの変態趣味の人かもしれない。どっかのヒーローをサポートする為のサンプルかも知れない。そう言うのがあると何処かで聞いたことがあるが、これの事かもしれない。

銀城「じゃあ、試しに……」

「本当ですか！ありがとうございます！」

此方をどうぞお受け取り下さい」

と言つて白装束の男は緑色に発光するピンを俺に渡す。何かヤバくない？発光して

るよ？緑色だよ？こう言うの大体ヤバイって相場決まってるじゃん。

チロリと男の方を見るが、ドウゾドウゾと手を此方に向けている。クソ！飲めってか？飲めってか!?!アーーーーー！もうままよ！飲んでやるつと俺は一気飲みした。

味は悪くない、喉越しもスツキリ爽やかでなかなか飲みごたえのある飲み物だ、すると俺の体から疲れが一気に取れ始めて来た。

### 《ドクン》

だが、突然ドクンと音が脳内に響き渡る。その瞬間、俺の体がヒビ割れた様になりそのヒビから銀色の光が出始めた。

銀城「はあ!?!な、何だよこれ！」

「フフフフ、何でしょうねぇ？」

男はとぼけた様に返事をする、

そして俺は光に包まれた。



「おめでとうございます！貴方は選ばれましたよ、人間を超越した存在にね！」  
男の発言に何の事だと目を開けると、俺は目を疑った。本当に信じられない。

全身が白く、コモドドラゴンの様に太い尾を持ち、胸に逆三角形の紫色の水晶を嵌め、  
大きな三角形の目玉を持った、銀髪のオールバックの化け物。  
俗に言う怪人になっていた。

銀城「はあ!?!ハアアアアアアアアア!?!」

え、ちよ、エエエエエエエ!?!」

「何故今の今まで貴方に会えなかつたのでしようかねえ。怪人や怪獣など、星の数以上の戦士を作つてきましたが人間の形に近い個体は貴方以外に偶然生まれた数体しか居ませんでしたよ」

何か言っているがイマイチ頭に入つて来ない。俺はこれから如何すれば良い?何をすれば良い?さっぱりわからない!?

「見つけたぞ怪人!」

すると、トラ柄のタンクトップを着た男が話しかけてきた。周りを目でチラチラと確認するが怪人は居ない。完全に俺だ、俺に言つてんだアレ。てか誰だっけ?

「虎っぽく戦うタンクトップタイガーが相手になるぜ!さあ、かかつて来いや!」

ああ、そうそうタンクトップタイガーだ。タンクトップマスターとか言うマツチヨの手下の一人だ。てか如何しよう。俺喧嘩なんてした事ねえよ、喧嘩つつても何時も被害者だったから勝てる気しねえよ、此処は大人しく訳を話すか?



# 1 発目：怪人、自分探しのイザコザブラリ旅

「皆様、災害レベル虎の怪人ジャツカル・デーモンが付近に潜伏しております。呉々もお気をつけ下さいます様お願いします」

「・・・参ったなあ」

その件の怪人、ジャツカル・デーモンは家具などの荷物をリアカーに乗せて、公園のベンチに座って困り果てていた。

ジャ「やっぱ突き飛ばしたのmazかったかなあー。いや、でもアレは条件反射だからなあー、あー！ー！頼むから時間が巻き戻ってくれー！！」

「どうかしたのかな、若人よ」

すると、ジャツカルの真後ろにある木の上から人の声が出た。そこには黒い髪をちょんまげの様に結っており、白い道着に紺色の袴を着た老人がいた。

ジャ「えーと？ 貴方は？」

「儂か？ 儂の名は『境谷 獣六』、道場で師範をやつてあるただのジジイじゃよ。そんな事よりもお前さんの事はよく知つとるぞ？ 何でもC級とは言えヒーローを突き飛ばし

たそうじゃないか。なかなか見込みあるぞ」

獣六の言葉にジャツカルはウツとなる。

ジャ「いや、獣六さん。俺は望んで怪人になったわけじゃないんだよ。そりや確かに見た目がアレなヒーローはたくさんいるけどよ、俺の場合は流石にヒーローには見えねえぜ」

獣六「確かに見ただけではな、だが俺はココでお前さんの事を見てたんじゃ。中身はただの青年と言った所かの？」

ジャ「獣六さん、あんた一体：「見つけたぞ怪人！」って何だいきなり？」

声のした方を見てみると、この前突き飛ばしたタンクトップタイガーとその仲間達が居たではないか。

ブラツク「お前か、弟を倒したのわ」

ジャ「いえ、人違いです。帰って下さい」

タイガー「嘘つくな！悔しい事にお前の事は俺が負けたという事でヒーロー協会に伝わっているのさ！」

ベジタブル「そして！その事で我らがマスターが動き出してくれたのさ！」

ジャ「えーと、マスターってもしかして：」

「俺の事だ」

その男の姿を確認して、ジャツカルは脂汗を流した。それもその筈だ、何故なら目の前に居るのはS級ヒーローのタンクトップマスターなのだから。

マスター「俺の事を知っててくれたのはよかったが、俺は手加減するつもりは全く無いからそのつもりでいろよ」

ジャ「(うわああああ!!最悪だああああ!!何でよりによつていきなり親玉呼んじやうの?!一匹見たら三十匹いる害虫かなんかよコイツらは!!よし、ここは一先ず……逃げる!!)それではこの辺で」

マスター「逃がさん!」

タンクトップマスターは逃げようとするジャツカルを逃さない様に地面を砕きタツクルを繰り出す、それをジャツカルはタンクトップマスターの頭に手を付き躲す。

ジャ「つぶねー!?マジでアブネー!」

獣六「ほほう?中々の身のこなしじゃな」

ジャ「いや俺さ、人間だった頃何かを観察するのが得意でさ。視力も良かったしその影響で何処をどうすればいいとか何と無く分かんだよね。その所為で目がデカくなっただけ……(それに、態々丁寧に地面を砕いてくれなきゃ右か左のどちらかに逃げてた。あの威力は下手に避けてもダメなタイプだ……気をつけねーと)」

タイガー「まさかマスターの『タンクトップタツクル』を躲せるなんて!？」

ブラック「よし弟よ、逃げる準備だ」

マスター「まさか俺のタンクトップタツクルを躲せるとはな…（地面を砕いたのはミスだったか…だが焦る事は無い、まだチャンスはある）フンッ！」

何度も拳を振るうタンクトップマスターだが、ジャツカルはそれを躲していく、舎弟のタンクトップ達は腰抜けと言っていたがタンクトップマスターと獣六はある事に気づいてた。

マスター「（こいつ…俺のタツクルを躲せる程速いのに態と全てギリギリで躲している。スタミナの消費を軽減して尚且つ正しく、正確に俺の攻撃を見定めるつもりか？）小賢しい！」

獣六「（人間は例えネットで守られていてもボールが来たら反射運動でつい仰け反って躲してしまう、だがそれは速いものに対してじゃ。あの若者は気づいてないんじゃないやろうが体感速度はかなり遅く感じ取るんじゃないやろな、真正面からの攻撃なら100%躲せるじゃないやろ）」

ジャ「（そろそろ焦れつつかく感じて大技で片付けようとして来る筈だな）あの、もう帰ってくれませんかねえ…」

マスター「悪いがそのつもりはない」  
タンクトップマスターはしつこく纏わり付く様にジャツカルを逃さない様に、先回りをして攻撃を仕掛ける。

《チャリンチャリン!》

鬱陶しそうに攻撃を避けるジャツカルのもとに一台の緑と紫の毒々しい色柄のマウンテンバイクがやって来た。

タイガー「アニキ! 何処からともなく謎の自転車が!？」

ブラック「よし弟よ! 今すぐスタンディングポーズを取るんだ!

マスター「何だか知らんが邪魔だ!」

タンクトップマスターはチャリチャリと喧しくベルを鳴らしながら走るマウンテンバイクに向かって蹴りを放つも、ピョンと飛んでジャツカルの元へと走った。

ジャ「何だ? 乗れってのか?」

マスター「(逃げる気か?) 逃がさんぞ」

それを防ごうと駆けるタンクトップマスター。

ジャ「来た! こうなりや見様見真似だ!

『ロック・ザ・キャノン!!』



ジャツカルは先程タンクトップタツクルの様に地面を砕き、その礫の勢いでタンクトップマスターを持ち上げ、ジャツカルは地面から大岩を引きずり出してそれを放り投げローリングソバットの勢いで蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた大岩はタンクトップマスターの体に見事に命中し近くを偶々通り過ぎたトラックに直撃した。

マスター「ゴハアツ!?ば、馬鹿な…」

タイガー「そんな、マスターが負けた!?!」

ブラック「クソオツ!!仇を討つぞ!」

ベジタブル「そうだ!やっち「邪魔!」

へぶふお!?!」

「んなろお!!」

「タンクトップ舐めんなやコラ!!」

ジャ「うおおお!!?彼奴ら山盛り来やがった、獣六さん!荷台に乗ってくれよ!」

獣六「ホツホツホ、良いじゃろう」

ジャツカルは不利と一瞬で感じ取り、荷台に獣六を乗せると周りのタンクトップ達を蹴散らしながら公園から脱出した。

\*\*\*

タンクトップの群れから無事逃げ切れたジャツカル達は歩道をトボトボと歩いていった。因みに荷台はジャツカルに寄り担がれおり、獣六は寝そべっている。

獣六「お主、これからもどうするのじゃ？ そんななりじゃ働く処か仕事だつて出来んじやろうに」

ジャ「やめてくれ、頼むからその重大な現実をストレートに叩きつけるのはやめてくれ。俺だつて考えてるよ、どうやらこの体、排泄も欲求不満も起きないからどうやら生殖器とかは無いみたいだけど、少し小腹が空いて来た感じがする。翌々考えてみればこれからの事を思つて食パン一切れしか食つてねえよ俺。折角仕事も慣れてきて出世来そうだったのによ……はあ、どうしようかねホント」

溜息をついていると突然、近くの建物の壁が壊れ劈く様な悲鳴が聞こえた。その方をまた見るとアメフトの選手の様な格好をしたヒーローが胸から大量の血を流して倒れている。

ジャ「おい！ 大丈夫かよお前！」

「うう……き、君は？」

ジャ「あ、初めまして。私最近怪人になった災害レベル虎のジャツカル・デーモンと申します」

「あ、丁寧にどうも。僕はC級ヒーローのアメリカンフットと申します。ってこんな事してる場合じゃなかった！早くしないと…ぐあ!？」

ジャ「おいおい、無茶すんなよ！このまま動き続ければ出血多量で死んじまうぞ！」  
アメリカン「だ、だけど…此処には君と同じ様に無理矢理怪人にされた人がいるんだ…」

ジャ「え…？此処ってCGSじゃないか！嘘だろ!?ここは俺が人間だった時に関わってた会社だぞ!!」

アメリカン「表向きはね…でも本当は武器の製造や密売、親の居なかつたり売られたりする子供を奴隷の様に扱って戦争紛いの事をしてるんだ。自分達は高みの見物で子供達を前線に立たせ、オマケに阿頼耶識を無理矢理取り付けているんだ!!」

ジャ「阿頼耶識って、嘘だろ、あんなマトモに扱えない欠陥品を使ってるのか!?しかも子供に!?信じられねえ…けど同時に許せねえよ!!」

アメリカン「そんな君に恥を承知で頼みがあるんだ。あそこにはこの傷を作った張本人がいる、そいつとは戦わなくていい…けれど子供達だけでも助けてくれないか？僕はもう戦えない。頼む！無力な僕の代わりに彼らを、子供達を助けてくれ!!」

ジャツカルは悔しそうに拳を握り、涙を流すアメリカンフットを見て心が震えた。彼の中ではヒーローらしい物は殆ど居ないと言うのが当たり前だった。アメリカンフット

トは自らの命を顧みず、全力で子供達を助けようとしているのだ。

獣六「行くのか？」

ジャ「ああ、厄介ごとには首を突っ込みたくなかったが知り合いが悪事を働いているとなると話は別さ。それに、この力の使い道…それはヒーローの様に人々を守る、それが正解だと思う…」

獣六「そうか…なら止めんわい」

ジャ「ありがとうな、獣六さん」

そう言うときジャツカルは建物の中に入っていった。その背後を荷台で大人しくして居たマウンテンバイクが付いていく。

ジャ「何だ？お前も来てくれるのか？」

《チリンチリン！》

ジャ「よし、行くぞ！」

その姿を獣六は見ながら呟いた。

獣六「頑張るんじゃぞ…若人よ」

この時、獣六は気付かなかつた。応急処置を済ませて気絶しているアメリカンフットに例の液体を持ちながら近づいてくる人影に……。

\*\*\*

建物の中、ジャツカルはドアや壁を粉々に蹴り飛ばしながら突き進んでいた。

ジャ「よし、これで最後だ！」

《ベキャン！》

歪な音を立てながら鉄製のドアを殴り破ると、そこにはアメリカンフットと言った通り子供達とその子供達を警棒で殴ろうとしているCGSの社員達がいた。破ったドアの近くには道化師の帽子の様な物を被った男女とムツキムキのスポーツマンっぽい格好をした男がニコニコしながら此方を向いていた。

マルバ「か、怪人!? 何故ここに!!?»

ジャ「何故はコツチのセリフですよ。何故ここに子供達がいるんですか? それにその振り上げている警棒に彼らの背中の出っ張り、納得できる様な説明が出来るのなら話してくださいよ」

マルバ「その声は銀城君か?! いや、これは、その、何と言うかな……」

ジャ「ああ、忘れてました。確か身寄りの無い子供達に阿頼耶識を取り付けて奴隷の様な扱いをし、更には戦争紛いの事をしているんですよ? 怪人になった俺にはもう関係ないけれどこのまま放って置いたらウチの社長が可哀想ですね。てな訳でその顔

面に一発拳を叩き込みます」

ヒイツ!、と悲鳴を上げるマルバにバキボキと拳を鳴らしながら近付こうとすると道化師帽子達のリーダー格の様なマツチヨが立ち塞がった。

ジャ「すみません、そこを退いてください。貴方には叩き込む拳を用意してないんですよ、それとも貴方がアメリカンフットンの胸に切り傷を作った張本人ですか?」

「いや、俺はライザー。見ての通り人間だが犯罪者でもある。俺達は国に認められた戦闘集団でね、この馬鹿共を操っている奴らに雇われてね。あんたの目的は子供達の救出、俺らの目的は子供達の脱走阻止何だけど……うくん、見事に敵対関係にあるね」

ジャ「だとすると……貴方方と戦う事になるか。話し合いで解決出来ませんかねえ? 一応戦争経験してるからって言っても子供の目の前だ、荒っぽい事は避けたいんですよ」

ライザー「話し合いで解決出来たら、あそこで腰抜かしてる馬鹿の顔面に拳を叩き込もうとか考えないだろう?」

ジャ「そりやそうか……ならやる事は一つしかねえな」

ライザー「悪いが手加減なんてしないから、そのつもりでいてくれよ?」

正に一触即発の様な空気が流れて来た。二人の体から針の様な鋭さを含ませながら燃え盛る炎の様なオーラが発せられ打つかり合う。その余波で壁や窓にひびが入り、天井はミシミシと音を立てて、床は二人を中心に沈み始めた。

「ちよつとちよつと何ですかコレ!!何が起こつているんですか!?!何故ここに彼がいるんです!!?」

すると、天井からモニターの様な物が出て来ると、謎のシルエットを映し出しながら驚きの声を上げた。

ライザー「何だ、あんたか?何か問題でもあるのか?」

「大アリですよ、彼はこちら側に引き込むつもりでいたんですからね。少し早いですけ

れど仕方がないですね、まあ立ち話も何ですからこちらに呼びましょうか……」

謎のシルエットの顔の中心から赤い光が浮かび出たと思うと、光り輝いて辺りを包み込んだ。

この時、ジャツカルを含む物達は知るよしも無かった。目を開けた時、そこが阿鼻叫喚の地獄の始まるとは……



## 2 発目：怪人、ガチで戦います【前編】

ジャ「何だここのは？」

ジャツカルの視力が戻った時には背景がガランと変わっていた。ジャツカル達の方放ったオーラでビビだらけの建物の内部から何処かの工場の様な背景になっていた。

「ようこそ、我々の隠れ家へ！」

すると、先程聴こえてきた謎の声が話しかけてきた。ご丁寧にスピーカーと監視カメラが合体した様な物を使って会話している。

ジャ「あんたか、ココは何処なんだ？」

「ココは我々がCGSに貸し出してる廃工場ですよ。ああ、そう言えば名乗るのを忘れてましたね…私の名前はメタリカ、はるか昔に名を轟かせた組織『抹消の武器』の幹部です」

ジャ「コマンド・メイツ？確か世界を敵にしてもなお破壊の限りを尽くした組織だっ  
て教科書に載ってたな。でも自然消滅したって聞いたぜ？」

メタリカ「いやね、別に世界はいつでも滅ぼせるのですが幹部しか居ないと言うのは  
とてもカッコ悪いので表舞台から身を隠して居たのですよ。そんな事よりもそちらの

扉から此方に来て下さい、招待しましょう」

その言葉と同時にモニターが切れ、扉が自分から開かれた。まるでジャツカルが通れる様に自身から動いた様だ。

ジャ「どつちにしろ行かないとダメだよな…よっしゃ！気張って行くぞゴラア!!」  
そう言つて扉の中に入つて行つた。

くフィールド・スタジアムく

ジャツカルが扉を通ると、そこには様々な競技に使われるジャンプ台や障害物があつた。

ジャ「オイオイ、何で工場の中にスタジアムがあるんだよ…ん？何だこの看板」

【このエリアの敵を倒せ】

ジャ「倒せつて…そんなザックリ…『フガフガー』ツ!?誰だ!!」

すると、ホップینگに乗つておしやぶりを啜えたフランケンシュタインがピョンピョン跳ねながらやつて来た。

「フンガー!!オデはポライケン、コマンド・メイツの強硬部隊の副団長だ！因みにフライケンシュタインは博士の名前で正式名称は『フライケンシュタインの怪物』だ!!」

ジャ「あ、そうなの…で？お前を倒せばイイのか？そこんどこどうなんだ？」

ポライケン「その通りだ！オデを倒せば新しい扉が出てきて先に進めるぞ！オデを倒せばの話だな!!」

ジャ「ケツ！こちとら一応はS級ヒーローに勝てるぐらいの実力はあるのさ!! さあ早速《チャリン!》って、お前は？」

謎のベル音に反応すると、其処には謎のマウンテンバイクが前輪を動かしながら何かを訴えて居た。

ジャ「…もしかして、お前も戦いたいのか？」

《チャリンチャリン!!》

ポライケン「フガガー！別に構わんぞ！むしろこのステージは軽車両が無いと不便だからな!!」

ジャ「ほう？ならば喜んで共闘させて貰うぜ！」

ジャツカルはマウンテンバイクに乗ると近くのジャンプ台を使ってポライケンに攻撃を仕掛けた。

\*\*\*

〈監視室〉

メタリカ「まさか、本当に彼が復活したとはね。出来れば記憶も受け継いだ状態にしておきたかったが：何とかならないのかいレギュラス？」

【無理なものは無理さ、やはりあんな急拵えの薬品じや完璧な復活は夢のまた夢さ】

玉座の様な椅子に座っているメタリカは、テレビ電話でレギュラスと呼ばれる人物と会話をしていた。

レギュラス「と言うか、本当にあの怪人王とか言う奴は信用出来るのかい？確かに奴の生物を怪人に変える事の可能な物体、所謂『怪人の種』と呼ばれる物は人によつて強弱が変わるだけでなく品性や常識さえ無くなる。我々やジャツカルとはお世辞でも似てるとは言えない」

メタリカ「それはそうさ！いま、この時代の怪人達を動かしているのは世界を救うか支配するかではない。どう世界を壊すかだ：我々やジャツカルシリーズの怪人は倒されない為に臆病になり、知識を集めに集め続けたがこの時代の彼等は倒されない為に力を求めたのさ」

レギュラス「どうせ裏切るつもりだぞ、奴等にとつて我等コマンド・メイツは目の上のたんこぶだからな」

メタリカ「裏切られたら潰せば良い、ただそれだけの事だろう？そんなに難しく考える必要はないさ。地道に行こう、地道に：おや？もう決着が付いたのかな？」

メタリカがモニターに目を向けると、ジャツカルがポライケンの顔面に一撃を加えているのが見えた。

レギュラス「おい、本当に案内する気か？」

メタリカ「まさか、彼も戻ってしまいましたしね：此処を抜けても意味が無い。まあ見てなよ」

ジャツカルが次の扉に入るのを確認したメタリカは嬉しそうに目を光らせた。

\*\*\*

どこかの街

新たな扉を通ったジャツカルの行き先は、街のど真ん中であつた。ジャツカルの目の前には「残念、人質は渡せないよ？」と書かれた看板が立てられて居た。

ジャ「チツ、しゃあねえな：獣六さんの所に戻るとするか：あのヒーローも心配だし「ちよつと待った!!」：とまあ簡単には行かないか、何者だ！」

そこには、先端がタケノコになっている槍を持ったヒーローステインガー、赤いマフラーを巻いたヒーロー赤マフ、ギリシャ風の寡黙な雰囲気の大男の大哲人、侍の姿の引きこも侍、全身骨柄のタイツを着た骨、全身に爆弾を付けたダイナマイトマンが現れた。ステインガー「お前が噂の怪人のジャツカル・デーモンだな！俺達がお前を倒してや

るぜ!!」

骨「負けてないとはいえS級ヒーローを圧倒した程の実力者だ、放っておけば後々厄介な存在になる。ここで倒すぞ!」

ダイナマイト「何とか隙を作ってくれ!おれがトドメを刺す!」

引きこも侍「それが得策だろう」

ジャ「(うわあ、大ピンチだ…どうすよう…)」

あまりの出来事にジャツカルは混乱してしまった、これ程までに一難去ってまた一難なんて事がある奴居るだろうか。だが、それがこいつだ「ウルセエ!ほっとけや!!」  
ちよ、地の文に割り込まないで…

ジャ「(さてよ、相手は普段一人で戦ってる様な奴ばかり…一対一に持ち込めば何とかなるかもしれん…その為には) ねえ、怪人が人に戻るって事例ある?俺元に戻りたいんだけど」

赤マフ「気を晒そうったってそうはいかんど!喰らえ必殺!『赤い流星k』ズガアン!!」

赤マフが得意技の赤い流星キックを喰らわそうとするも、ジャツカルはそれを掴んで近くにあった車に叩きつけた。

ジャ「あの…流石に防げるよ？そんな安直なの」

大哲人「むううう…『3t哲学全書』!!」

ステインガー「『ギガンティックドリルスティンガー』!!」

赤マフがやられた事を火蓋に大哲人とステインガーが攻撃してくる、ジャツカルはその場で大きく飛んで攻撃を躲した。そう、文字通り飛んだのだ。背中から機械のような翼を生やして空に逃げると今度は両手に水色の液体の様な物を纏って地面にいる二人に向かつて両手を振り下ろした。

ジャ「『気功弾』!!」《ズドオオオン!!》

「ゴフアツ!」

その液体の様な物は拳を中心に円形に広がり、二人を地面に埋め込んだ。

ジャ「…（このオーラみたいなの、体からドンドン出てくるな。それに周りが濡れている、俺は水を操る怪人なのか？あー、判らん、全く持って判らん…）」

ダイナマイト「おい！いきなり三人共やられちまったぞ!」

骨「ココは俺に任せろ、俺は生まれつき骨が人より頑丈な特異体質でな。更に牛乳を飲むと一時的に骨の強度が増す…」

そう言つて骨は何処からか調達した牛乳を沢山抱え、それをザトウクジラのようにゴクゴクと飲み始めた。





がケケケーッツと何処かの仮面ライダーの様に飛び上がった。

\*\*\*

「オイオイ、本当に瞬殺じゃねえか…」

「ロクちゃん言う通りじゃな…：悪意は無さそうじゃが。とても強いのは変わらないの」

「どうします？今すぐ行きますか？」

「いや、他のS級とA級が来るまで待とう」

ダイナマイトマンを気絶させて、身体中に付いたダイナマイトを取り外してどう処理しようか困っているジャツカルを高いビルの上から見守っている者達…：彼等との関係がどうなるか、それはまた次回。

## 連絡事項

この小説をブックマークして下さっている皆様方にご連絡します。この度、この小説ことデimonマンを新たに投稿し直すことにしました。

理由としては：やはりゴチャゴチャして纏まっていないから話を作りにくい事です、だいぶ初期の方に書いてたとは言え酷いと思うので新たに投稿し直すことにした次第です。

諸々変更させていただきまますので、楽しみに待っていてください。

### ●変更点←

コラボ作品である『機動戦士ガンダム 鉄血のオルフェンズ』の部分を抹消します。主人公のヒーロー協会から呼ばれてる怪人名を「アルビノクソトカゲ」に変更、ジャック・デーモンなのは変わりませんがヒーロー側からは暫くの間「アルビノクソトカゲ」で呼ばれます。

主人公のヒーローの価値観を変更、「金や名声に拘る変な力をもった変人集団」から「何でもやる公務員」にします。

「境谷 獣六」の登場破棄、代わりにのお爺ちゃんキャラを出す所存です。

毒々しい色のマウンテンバイクのお助けキャラは退場、マウンテンバイクはイミフ過ぎだった……普通のバイクに変形するやつをお助けキャラにします。あと船とか飛行機とか電車とか様々なものに変形する奴を用意するつもりですが、全部出せるかどうかはちよつと分かりません……未定ですね、はい……………。

●追加点←

ココからは追加する予定の作品を述べていきます。

混血のカレコレ

ハイスクールD×D

この素晴らしい世界に祝福を！

秘密結社ヤルミナティ―

ティコウペンギン

HUNTER×HUNTER

毒蛇転生く毒沼に落とされたいじめられっ子が、毒蛇に転生して無双する話く

ライドンキング

地獄の業火で焼かれ続けた少年。最強の炎使いとなって復活する。

夜桜四重奏

異世界支配のスキルテイカー　ゼロから始める奴隷ハーレム  
べるぜバブ

マツシユル―MASHLE―

全力回避フラグちゃん！

ポポボーポ・ポポボーポ

吸血鬼すぐ死ぬ！

ナンバカ

ブサメンガチファイター

アカメが斬る！

インフィニット・デンドログラム

ソード・アート・オンライン

ニードレス

ムシブギョー

盾の勇者の成り上がり

オーバーロード

モンスターハンターシリーズ

Fateシリーズ

僕のヒーローアカデミア

仮面ライダーシリーズ

戦隊シリーズ

ドラゴンクエストシリーズ

マイクラフト

野生のラスボスが現れた

骸骨騎士様、只今異世界へお出掛け

キングダムハーツ

ソウルイーター

今の所は上記の物を検討しております、キャラクターそのものではなく能力などを登場させるものもありますのでご注意ください。

それでは皆さん、リメイク版をお楽しみに!!